

平成23年12月

片山理恵 学位論文審査要旨

主査 前田隆子
副査 廣岡保明
同 花木啓一

主論文

乳幼児をもつ母親、父親の家族機能と子育て支援

(著者：片山理恵、内藤直子)

平成23年 女性心身医学 15巻 294頁～304頁

学 位 論 文 要 旨

乳幼児をもつ母親、父親の家族機能と子育て支援

子育ての始まりは、家族構成員の増加現象から始まる。これは、子育て環境の人的環境の変化であり、新しい家族との新たな関係性を作りつつ、試行錯誤しながら子育てを行うことになる。家族が増える時期である養育期の夫婦の家族アセスメントとして、家族の対応能力を知ることは重要である。家族の1単位である夫婦の関係性の1つの側面として家族の機能的側面を検討することで、養育期の夫婦へより適切で効果的な子育て支援の方法を見いだす基礎資料とすることができると考えた。本研究では、0～3歳の乳幼児をもつ夫婦の家族機能の現状と家族機能からみえる母親、父親への子育て支援の今後のあり方について検討することを目的とした。

方 法

対象は0～3歳児の乳幼児をもつ夫婦である。調査場所は、A県の保健センター、助産院、保育園で、同意の得られた夫婦363組に調査票726票を配布、回収（回収率33.9%）した。分析対象は夫婦ともに有効回答の母親60名（ 31.74 ± 3.92 歳）、父親60名（ 33.03 ± 4.40 歳）とした。調査期間は2006年11月から同年12月である。調査方法は無記名自記式質問調査とし、質問紙構成は基本属性（年齢、家族形態、子育ての支援者、子どもの数、末子年齢、就業形態、育児経験の有無）、Olsonの家族機能測定尺度FACESⅢ（草田ら訳、凝集性と適応性）、Rosenberg, Mの自尊感情尺度（山本ら訳）および希望する子育て支援の自由記述である。統計解析はソフトSPSS15.0J for Windowsを用い、有意水準は $p < 0.05$ とした。倫理的配慮は、学内倫理審査を受け、依頼書に研究参加は個人の自由意思で行うよう記した。

結 果

家族形態は、核家族56組であった。家族機能の凝集性は母親 39.45 ± 6.52 、父親 38.28 ± 6.48 で有意差なく、適応性は母親 30.13 ± 6.32 、父親 28.50 ± 5.49 で有意差はなかった。子ども人数別の母親の凝集性、適応性ともに有意差はなかった。父親の凝集性は、子ども1人 40.47 ± 4.55 、子ども2人以上 35.00 ± 7.58 で有意差がみられたが、適応性には有意差はなかった。家族機能と自尊感情の関連は、母親は、凝集性と適応性に有意な正の相関がみられ、父親は、凝集性と自尊感情に有意な正の相関がみられた。

考 察

凝集性、適応性ともに母親と父親で有意差がなかったのは、夫婦がお互いに家族機能に対して同様な感じ方、考え方をしているためであると考えられる。父親の凝集性は、子ども1人の方が夫婦間の情緒的つながりが強く、父親は子どもが産まれることで絆をより深く感じていたと考える。ところが父親は子どもの数が増えると意識の中で家族を守るために仕事への重要性が増し、結果的に夫婦の情緒的つながりを捉える思いが低くなっていたと考える。

母親の凝集性と適応性に有意な正の相関がみられ、母親は常に家族の気持ちのつながりと家族の危機への対応能力が同様に変化し、子育てへの対応も良好な対応へ導く機能を持っていると考える。父親の凝集性と自尊感情に有意な正の相関がみられ、家族のつながりが自分自身の評価を高めると考えられる。

結 論

父親の凝集性は、子ども2人以上で低下する傾向がみられ、育児への協力が得られない場合は注意が必要であることが示唆された。